

けんしんシンガポールレポート

シンガポールの教育制度

2019年12月初旬、経済協力開発機構(OECD)は、世界各国の15歳の子供を対象に読解力、数学、科学の3分野の学力について3年に1度実施している国際学力調査「PISA」の最新調査(2018年実施、世界79か国・地域の1,000万人以上が対象)の結果を公表しました。この調査は日本で「脱ゆとり教育」のきっかけとなったもので、今回も公表結果が日本でも大きく報道されました。この調査におけるシンガポールの結果は、前回調査から順位を落としたものの、全ての分野で2位でした(前回は全ての分野で1位。今回、日本は読解力15位、数学6位、科学5位)。

また、英教育情報誌タイムズ・ハイヤー・エデュケーションが発表した「2019年アジア大学ランキング」でも、シンガポール国立大学(以下NUS)が2位、南洋理工大学(以下NTU)が6位と、東京大学の8位、京都大学の11位を上回るランキングがされています。

今回は世界でも有数の「教育熱心な国」として知られるシンガポールの教育制度をご紹介します。

【 要 旨 】

- シンガポールは、経済協力開発機構(OECD)が実施する国際学力調査「PISA」の全ての分野で世界2位と、高い学力レベルを誇る。また、シンガポール国立大学(NUS)、南洋理工大学(NTU)もアジア大学ランキングで東京大学を上回る高いランキング。
- シンガポールは「初等教育終了時に人生が決まる」と言われるほどの受験大国、教育大国。
- シンガポールの教育制度の二大特徴は、「二言語教育」と「ストリーミング制(選抜主義的教育システムによる振り分け制度)」。
- その背景にあるのは、「唯一の資源は人材のみ」という「国家として生き残りをかけた危機感と信念」。経済、開発、教育を一体として推し進めた結果、独立後50余年で大きな発展を実現。
- 近年は教育システムに対し多くの社会問題が顕在化。それを受け、2019年に40年来続く「ストリーミング制度」の廃止を発表。大きな話題に。
- 制度廃止には、社会問題の解決のみならず、時代のニーズや求められる人材の資質の変化に対応し、更なる発展のために必要な人材、多様な人材を育成しようとする一面も垣間見られる。
- 教育制度の改革に合わせ、新たなビジネスチャンスも期待されると思料。

1. シンガポールの教育制度概要

シンガポールは数回の制度改革を経て、現在は、基本的には暦年制による初等教育6年、中等教育4年～5年、高等教育2年～3年となっており、その後、大学進学となります。義務教育は初等教育の6年間。また、次項で詳細をご紹介しますが、初等教育終了以降は、人により進むコースが異なり、コースにより就学期間が異なります。

2. シンガポールの教育制度の特徴とその背景

シンガポールの教育制度は、「全ての国民に均等に教育機会を与え、家庭、社会、国家への責任感を培い、良き国民を養成すること」を目的としています。その中で貫かれてきた政策は「二言語教育」と「ストリーミング制(選抜主義的教育システムによる振り分け制度)」です。この特徴的な教育システムがシンガポールで貫かれてきたことには、歴史的背景があります。

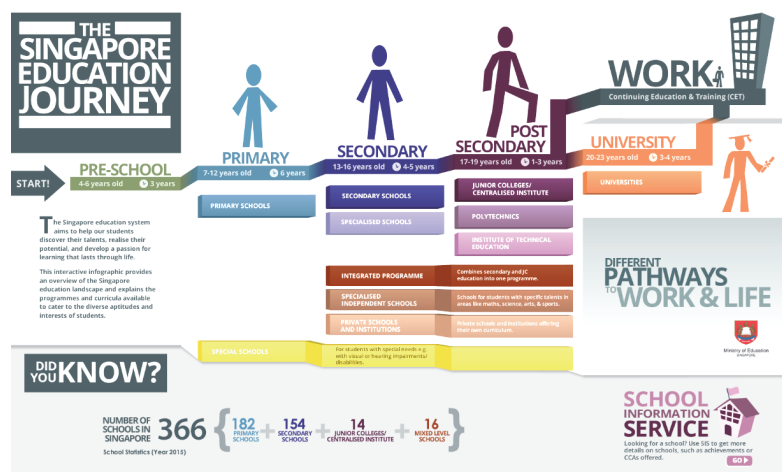
十分な国土もない。人口も少ない。また、資源もなく、水すらも輸入に頼らざるを得ない。

ASEAN の大国に囲まれたこの小国では、人材こそが唯一の資源であり、時代の変化に対応できる人材育成＝教育こそが「生き残るための術」との危機意識が教育制度に反映されてきました。故に、シンガポールでは経済、開発と教育は一体で考えられてきました。

シンガポールは、中華系、マレー系、インド系を中心とした多民族国家です。その民族構成を反映するとともに「アジア人としてのアイデンティティを保つため」に、公用語は、マンダリン(数多くある中国語の中の標準語)、マレー語、タミル語及び、全民族共通語としての英語の4言語です。学校教育でも、独立後の1966年から、第一言語として英語を、第二言語としてそれぞれの民族の母語を学ぶことが義務化されています。二言語教育には、「世界の共通言語である英語の教育を施して国民皆が英語教育を受けていることを強みとし、また、英語の思考法によって新しい発見や発明に繋がる効用をも考慮し、世界に向けて門戸を開放するため」との目的がある一方、「多民族国家の強みとして、伝統文化や母語のもつ力を失ってはならない」との狙いもあるようです。

ストリーミング制は、1979年から開始された制度で、優秀な人材を早期に発掘し育成をする選抜主義的な教育制度です。この制度では、初等教育終了時に英語、第二言語、算数、理科の四科目からなる「初等教育終了試験(Primary School Leaving Examination 以下、PSLE)」が実施され、その試験結果によって「エクスプレスクース」「ノーマル(アカデミック)」「ノーマル(テクニカル)」の能力別3コースに振り分けられ、SECONDARY(日本の中学校に相当)で入学できる学校を含め、その後の進学ルートも決められてしまいます。このPSLEの結果次第では、初等教育においてさえ留年の可能性もあります。また、SECONDARY 終了時には進学コースに応じて、ケンブリッジ普通教育認定「GCE O 試験」「GCE N(A)試験」「GCE N(T)試験」が実施され、POST SECONDARY(SECONDARYの次の学校)終了時には「GCE A 試験」の実施と、一発勝負の試験が続き、大学に進学する生徒は一握りです。また、とりわけ成績が優秀な学生には「国家奨学金」を支給し、海外留学をさせて将来の官僚を育成する制度もあります。

「初等教育終了時に人生が決まる」と言われる由縁はこのシステムにあります。人材こそを唯一の資源として、国を導くことができるリーダーを早期に発掘・育成する一方、座学の苦手な生徒には手に職を付けさせて国際競争力のある労働者として育成しようとする、国家として生き残りをかけた危機感と信念の表れでもあるように思います。



シンガポールの進学課程

3. シンガポールの大学

シンガポールには国立大学が6校あり、大学進学率は30%台前半とされています(政府は2020年までに40%を目標に掲げている)。冒頭にご紹介したように、特にNUSは世界的にも評価されるシンガポールきっての大学で、英国の大学評価機関のランキングでは、NTUと共にアジア1位にランキングされています。前述のとおり、受験戦争を勝ち抜いた選ばれし者がNUSの門をくぐることになりますが、NUSが高い評価を受ける理由は学歴によるものばかりではないようです。NUSの強みは、多くの留学生の受け入れや、日本も含め世界の多くの大学や企業と共同研究を進めるなど、その国際性にあります。グローバル化を図る中で、海外の有能な人材がもたらす才能・知識をシンガポールの発展に活かすべく、世界中の人材に投資を行ってい

ます。具体的には、教育を受ける側だけでなく教える側の質の向上も重要と考え、海外から教員や研究者を招聘するなど大学や研究所の質の強化を図ったり、また、海外への留学生に対して、卒業後の一定期間はシンガポールでの就業を義務付けつつも奨学金制度を充実させて、経済的支援を行うなどしています。

4. シンガポールの教育制度の今後

突然の望まざる形での独立から 50 余年でシンガポールが現在の繁栄を成し遂げた裏には、同国の教育制度が果たした役割がかなり大きいと思います。しかし近年では、過度な競争による子供へのストレス、大卒者とそうでない者の社会的な溝、幼児教育からの塾通いなども当たり前で富める者の子息が更に富むという経済格差などが指摘されており、ひいては教育費の高さが少子化の一因では、という論調まであります。現地情報機関の話によれば、シンガポールでの塾への支出は年間 S\$14 億(約 1,120 億円)超に上るとのことです。実際、子供を持つシンガポリアンに話を聞いてみると、子供の将来のために十分な教育を与えたい思いがありつつも、親の経済的負担も相当なものがあるようです。更には、子供を有名校へ入学させるため、住民票の虚偽申請で罰金を科されたとの報道もされるなど、社会問題に発展するケースも出ています。

これらの背景もあり、近年は評価制度の変更、スポーツ学校や芸術学校、**Integrated Programme** と呼ばれる中高一貫校の増加等、生徒の才能や興味に合わせた進学制度を導入し、学業成績に縛られない柔軟な制度へ転換を図る動きも出てきています。

このような動きの中、2019 年 3 月、シンガポール教育省は、40 年来続けてきたストリーミング制度を 2024 年までに段階的に廃止し抜本的改革を行うと発表しました。このニュースは、年末に「2019 年シンガポール重大ニュース」として取り上げるマスコミもあるほど大きな衝撃でした。とは言え、時代の変遷とともに求められる人材像が変化していく中でも、シンガポールの経済・開発と人材育成が一体であることには変化がないと思われます。時代とともに変化を遂げるシンガポールの教育制度の今後が注目されます。

別の視点では、前述のとおり家庭の塾への支出が年間 S\$14 億超となるなど、教育関連ビジネスも盛んです。また、小学生の近視率が 65%を超え、日系大手眼鏡ストアもシンガポールでビジネスを拡大させています。今後、政府の方針変更により、新たなビジネスも生まれてくるのではないのでしょうか。

5. 終わりに

シンガポールの成長を支えてきた教育制度。歳出に占める教育関連予算も 15%超と、シンガポール政府の教育にける意気込みが窺い知れます。

40 年来続いてきたストリーミング制度の廃止は大きな衝撃であったようですが、社会問題の解決のみならず、目まぐるしく変わる時代のニーズや求められる人材の資質の変化に対応し、更なる発展のために必要な人材、多様な人材を育成しようとする一面も垣間見られます。過度な初等教育に目が行きがちですが、他方、政府は家計が

困難な状況にある者や成績下位者向けのタスクフォースを設置したり、生涯学習を向上させるための指針や支援を充実・拡大させるなど、絶えず国際競争力を持つ人材を育成しようとしています。国家の財産となる人材を育成するため積極的に施策を打ち出すシンガポールの取り組みは日本でも参考に値すると思われますし、そこにはまた、制度の変更に伴う新たなビジネスチャンスもあるように感じます。



シンガポール国立大学

駐在生活記

マーライオンを探して

シンガポールのシンボルと言えば、やはり「マーライオン」ではないでしょうか!? 今更ですがマーライオンは、頭がライオンで胴体は魚、海を表す「マー」と「ライオンの町(シンガプーラ)」という、この国の歴史を象徴しています。

そのマーライオン、「世界三大がっかり名所」のひとつと言われますが、筆者はマーライオン公園にあるマーライオンがお気に入りです。

現在のマーライオンは数回の移転を繰り返し、2002 年に現在の場所に移転されたようですが、以前のものは水を吐いておらず、しかも後ろ姿しか見えない場所に設置されており、評判通り「がっかり」だったとの話も聞かれます。しかし現在は、水を吐く白いマーライオンの背後に高層ビル群が映え、まさに「The シンガポール」の光景。目前にはマリーナベイも広がってとても開放的です。

シンガポールの象徴、マーライオンですが、インターネット上の情報によれば公式マーライオンは国内に6つあるとも、7つあるとも言われています。駐在生活も丸4年を超え、勝手に帰国までのカウントダウンを始めたのを機に、可能な限りのマーライオンを見て回りました! それぞれに違った表情があり、何とも感慨深いものがありました!

ただ1つ残念だったのは、セントーサ島にあった、人も登れる高さ 37 メートルの巨大マーライオンタワーが 2019 年 10 月をもって営業を終了し、解体されることです(既に工事区域となり敷地内には入ることが出来ませんでした)…。ただ、これはセントーサ島の再開発に伴う決定だとか…

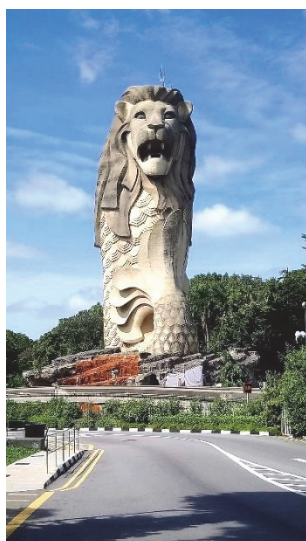
「これまたシンガポールらしい! 」と妙に納得をしたマーライオン巡りでした!! (筆者:本島 清隆)



マーライオン公園



シンガポール政府観光局



セントーサ島マーライオンタワー



マーライオン公園のミニマーライオン



マウントフェーバーポイント

【参考文献】

シンガポール教育省 HP、「シンガポールを知るための 65 章」、「リー・クアンユー、世界を語る」、CEL「シンガポールの教育制度から日本は何を学べるか」、現地各紙報道・情報紙

ここに記載されている情報は、情報提供を目的として作成したもので、何らかの勧誘を行うものではありません。当資料は信頼できると思われる情報に基づいて作成しておりますが、その正確性や妥当性を保証するものではありません。ご利用にあたってはお客様ご自身で判断くださいますようお願い申し上げます。